

星って、みんな生きているから
光っているんじゃないやなくて。



アキラ・ザ・ハスラー (アーティスト)

「この本は当時、数年間のブランクを経ての久しぶりの作品だったんですよ。今の名前で活動しはじめた作品でもありません。」

2000年の初版が売り切れ、18年には韓国でも出版、昨年、約四半世紀ぶりに再版された『売男日記』。

「あなたが「慈しみ、悲しむ」事ができる、人間である事を思い出したら、どうかその銃を持つ手を降ろしてくれ。」セックスワークの合間に綴った、こんな言葉が、英語、韓国語、中国語にも翻訳されています。

アキラさんのこれまでの出会い、現在の実感などをお聞きしたインタビューです。

素敵な

めぐりあいの連続

大学に破天荒な先輩がいて「百個くらいのペンキ缶に絵を描いて、バイクで突っ込む展示をやるから手伝え」と言われて(笑)。そんなパンクな人たちとギャラリーを借りて展覧会をしてたんですけど、あるとき、使用料を払えずにいと、オーナーが「ここで働いて払ってもいいよ」と言ってくれて。そのとなりがダムタイプというパフォーミンググループのオフィスで、中心的メンバーだった古橋二さんがいて、そんなふうに大学の外で色んな人とつながって

いきました。

古橋さんは毎月、クラブでパーティーをしていました。ハウスミュージックが流れるなか、ドラァグクイーンのショーがあって、そこで出会ったゲイやレズビアンやトランスジェンダーの人たちは圧倒的にかっこよかった。バイトしていたギャラリーのオーナーに「これからのアート界はクィアのほうが上手くやってるんじゃない？」なんて冗談めかして言われたり(笑)。そんなこんなで自分はゲイだと気づいたけど、セクシユアリティを恥じる気持ちが全然なかった一因は、素敵な生き方の先輩たちに出会っていたからでしょうね。

トどころじゃなくなつて。

HIVへの差別は「外国人やゲイ、セックスワーカーがウイルスの温床」みたいに、この社会がマイノリティに背負わせるステイグマにどう対峙するかという問題でもあります。90年代当初、この問題に取り組みうち、やっとゲイだと気づいたばかりの自分にはあまりにも経験が不足していて、ちゃんと現場に踏み込まないと手がかりが掴めないような気がしていました。

のちに古橋さんがHIVに感染したことを公表したとき、ダムタイプを中心とした京都のアート界の一部は呼応して「この未曾有の感染症にアートだけでは太刀打ちできない。社会運動も展開しよう」と。「アートはHIVにどう向き合う？」というそもそもの問いが、本当にそれぞれ問いかけてあって、それぞれのアーティストが身心を削っていきなり難問に直面して、そのうちアー

古橋さんが95年に亡くなった後、ぼくはセックスワークを始めて、仕事の合間、主に夜にずっと日記を付けていました。その三、四年後、東京のギャラリーで三人のセックスワーカーたちと「The Biers」というユニットを作って、自分たちの仕事の日記を展示しました。「売女」と「Biers(噛みつく)」を掛けた名前の展示を観たある美術館の方が「本にしたい」と言ってくれて出版されたのが『売男日記』です。

情けない人同士、語りた言葉が。

続きは本誌でどうぞ



ニッポンがしたこと ——なぜ戦争はダメなのか

1945年から80年という時間が流れ、
かつての戦争を経験していない人がほとんどになりました。

戦争を経験せずとも、現在も戦火の報道に悲しみを覚える人は多いはずですが。

しかし、80年前は、日本が戦争の当事者であり、加害者でした。

ニッポン——つまり、「大日本帝国」は一体何をしたのでしょうか。

今回の特集では「大東亜共栄圏」、「七三一部隊」、「慰安婦」問題などの史実を取りあげます。

独り善がりの政策、人間をモノとして扱う差別・暴力、日本の根幹に関わる問題など、

戦後80年を過ぎた今も他人事ではないようです。

親鸞の語録『歎異抄』には、きっかけさえあれば私たちが「いかなるふるまい」もする、とあります。

かつて東本願寺（真宗大谷派）の多くの先達もこぞって戦争に加担しました。

その反省ゆえに敗戦から50年を経た宗派の「不戦決議」（1995年）には、

戦争を「未然に防止する努力を惜しまない」との決意が述べられています。

「ニッポンがしたこと」を忘れず、過ちを繰り返さない。

後に続く人たちに穏やかな世界を手渡したい。平和への道に立つための特集です。

*本特集には、テーマを追究するに際して、差別や残虐行為についての記述、関係する画像の掲載があります。

真宗大谷派の機関紙『真宗』（1937年11月号）の表紙写真（カラー化）。1937年10月16日、真宗大谷派、本願寺派、高田派、興正派、佛光寺派、木辺派の各本山は同日同刻に「報国法要」を勤めた。『真宗』には「立教開宗以来はじめての、特別法要」で、「法要の趣旨は真宗教徒として非常時国難に処し、日頃の固き信念に基づく烈々たる国民精神の上より、（中略）いよいよ尽忠報国に邁進」すべき、とある。当時の教団は積極的に戦争に加担した。

インタビュー

「大東亜共栄圏」とは

安達宏昭

――あまりにも「日本的」だった政策の内実

アジア・太平洋戦争が始まった翌1942年、当時の首相である東条英機は、戦争を遂行しつつ

「大東亜共栄圏」建設の大事業に邁進すると内外に示しました。

――この政策の立案、実行から破綻までの全貌を描いた

『大東亜共栄圏 帝国日本のアジア支配構想』（中公新書、2022年）の著者 安達さんにお話を聞きました。

総力戦体制のため、 自給を目指した圏域

――まず「大東亜共栄圏」という言葉について教えてください。

大東亜共栄圏とは、一言で言えば、日本が経済的自給を目指した圏域です。第一次世界大戦（1914～1918年）後、日本が世界で戦

争に勝ち抜くために、国家の総力を挙げた「総力戦」が求められていきます。そこで必要だったのが、自前で兵器を作れる軍事工業力と、その原料の確保です。

ただ日本は、石油をはじめ軍事物資を帝国内で調達することができない状況だったため、アメリカやイギリスから調達しながら、中

国と戦争を続けていました。しかし中国との関係が影響して、アメリカやイギリスとも関係が悪化。それに追い打ちをかけるように第二次世界大戦（1939～1945年）が起ります。

第二次世界大戦の始まりは、1939年9月のドイツ・イギリス・フランスの戦争ですが、その影響が実は非常に大きいです。その時、日本はイギリスの植民地に物を売って稼いだポンドをドルに換えて、アメリカから石油やくず鉄を購入していました。ところが第二次世界大戦が始まったことで、ポンドとドルの切り替えが停止に

なり、アメリカから物資を購入できなくなってしまったため、日本に大きな影響がありました。

それ以降日本は、資源が豊かな東南アジアからボーキサイト（アルミニウムの重要原料）などの獲得を目指します。それを後押ししたのが1940年4月以降のドイツの席巻です。特に、フランスとオランダがドイツに負けたというのが重要でした。ベトナム・ラオス・カンボジアはフランスの植民地、インドネシアはオランダの植民地でしたが、ドイツの本国への侵攻により、これらの植民地が不安定になりました。そこへ日本が

続きは本誌でどうぞ

インタビュー

「七三一部隊」とは

吉中 文志

——非人道的「実験」のない未来のために

「京都大学は七三一部隊に関係していた」。

戦争とソ連領抑留を経た父親のそんな一言を聞いた吉中さん。

部隊の主要人物が卒業した京大に入学、

部隊のことは学内で時折耳にしたそうです。

だんだんと関心が深まり、20年以上この課題を追究しています。

戦時下の「実験」、差別、倫理についてのお話です。

身も生命も収奪した部隊

——「七三一部隊」の概観を教えてください。

七三一部隊は、敗戦まで存続した、大日本帝国陸軍の防疫給水部隊です。この名称からわかるように、日本軍兵士が風土病などに罹らな

いよう清潔な水を供給することが任務ですが、もう一つの任務がありました。当時、陸軍軍医学校の防疫研究室は毒ガスや細菌兵器の研究や開発をしており、七三一部隊はその実験部隊でもあったので、防疫給水と併せて、本土ではできない非人道的な人体実験を行うという二重の役割がありました。部

隊の中心には京都大学医学部出身の軍医、石井四郎がいました。

最初、中国の黒竜江省、哈爾濱

近くの背蔭河に施設をつくり、

1933年には人体実験をしています。人は青酸カリを注射すると

どれくらいで死ぬか、どれほどの

電流で焼け死ぬか、蒸留水だけで

何日生きられるか。細菌兵器の開発

に加え、色々な人体実験が行われ

ました。

1939年には平房に5キロ四方の大規模施設が完成し、3千人

に及ぶ研究者などがいて、「マルタ」と呼ばれた被験者のための監獄も

ありました。当然、ここでも人体

実験をしました。この平房本部の

名称が七三一部隊で、欧米やソ連

の研究施設に模して作られた総合

研究所でした。

非人道的と形容する理由

——「非人道的」と指摘されるのは、どんな点でしょうか。

まず明確に区別すべきは、七三一部隊は、薬や治療法を開発するために実験していないということです。正反対ですよ。戦争のため、人を殺すために実験をしています。この時点で人道から逸

続きは本誌でどうぞ

「慰安婦」問題とは

——大日本帝国の「根幹」に向き合う

梁・永山聡子

かつて「慰安婦」問題は戦争の「枝葉」と考えていた――。

そう語る梁・永山さんは今、

この問題を戦争の「根幹」と見据え、研究を続けています。

なぜ戦争はダメなのか、その「根幹」をお聞きしました。

日本軍・戦時・性暴力の問題

——「慰安婦」問題には「従軍慰安婦」問題、「戦時性暴力」または「日本軍性奴隷制」の問題などの呼称があります。

被害の当事者、支援者の立場、この問題への距離の取り方など、取り組む人のまなざしが呼称に反

さんが自分の受けた被害を告発し、

更に各国から証言が続き、史実が

掘り起こされていきました。そこ

でわかってきたのは、慰安所にい

た「慰安婦」のみならず、慰安所

の外でも多くの人が同様に迫いま

わされ、誘拐、監禁され、性奴隷

状態に置かれたこと。更に年齢、

民族、社会階級などによって被害

に様々な異なりがあることでした。

それらは一括りにできないので

「日本軍戦時性暴力」または「日

本軍の性暴力」という呼称も使わ

れます。つまり、いわゆる「慰安

婦」問題には、制度上の慰安所で

行われた性暴力の問題、そして、

非制度上で行われた性暴力の問題

もあります。

現在確認できる、最も古い慰安

所は1932年、上海にあった海

軍の例です。続いて陸軍も慰安所

をつくっていきます。日本軍は「慰

安婦」制度に大した問題はないと

考えていました。日本には遊郭が

ずっとあって、明治から公娼制度

もあるので、当初はその軍隊版と

しか思っておらず、まさかこま

でひどいことになるとは考えてい

なかった。だから、戦後約50年を

経た告発に多くの人が驚いたわけ

映されますね。ちなみに「従軍慰安婦」という呼称は戦後の造語で、現在あまり使われません。また、「慰安婦」が置かれた状態は、世界的には性奴隷状態と認識されるので「日本軍性奴隷制」の問題と

言う人も多いです。1977年に裴奉奇さんが当事者としてメディアで証言したのが

最初で、その後91年8月に金学順

続きは本誌でどうぞ

映画『ビルマの豎琴』が おき忘れたもの

永田喜嗣

ながた よしつぐ

1963年、大阪府生まれ。戦争映画研究者、作家。大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士課程修了。論文に「抗日映画論―恥辱と抵抗の構造」(大阪府立大学、学位論文)。



『戦争映画を解読せよ！
ナチス、大日本帝国、ヒロシマ、
ナガサキ』
著者 永田喜嗣
発行 青弓社
定価 3,960円(税込)

2025年8月15日、戦後80周年を迎える。満州事変、日中戦争を経て太平洋戦争、そして敗戦。明治・大正時代の日清日露の戦役、第一次世界大戦も含めた日本の戦争の歴史が終息をみて、80年の年月が流れた。

この間、日本人は様々な文化を通じて戦争を見返してきた。日本の戦争映画もまたその一つである。日本人は戦争映画を通じて、自分たちが経験した戦争をいかにして観察してきたのだろうか。

数々の戦争映画のなかでも、広く日本人の記憶に深く刻みつけられた作品といえば、『ひめゆりの塔』、『二十四の瞳』、『ビルマの豎琴』などが思い浮かぶのではないか。

特に文学作品を原作とした『二十四の瞳』

と『ビルマの豎琴』は、俗にいう感動の名作であり、多くの日本人びとが胸を振るわせ涙を流した。戦争は二度と起こしてはならない悲劇であるということを見せてくれる作品、いわゆる反戦映画でもある。

日本の戦争映画は、戦後の日本国憲法のもと、民主主義国家として、過去の戦争に対して反省の立場をとる反戦映画であることが基本である。

反戦とともに、『二十四の瞳』も『ビルマの豎琴』もヒューマニズムにあふれている。前者では、島の小学校の教師と、のちに戦争に駆り出され戦死する子どもたちの間の絆。後者では、ビルマという異国の地で、故郷や家族を遠く想いながら戦死して無惨に骸を荒野

や密林にさらす戦友を弔うために、ただ一人、僧侶となってビルマに留まる決意をする水島上等兵の心情。そうした人間の素朴な「哀しく美しいもの」が、われわれの心をゆさぶり、許されざる戦争のメッセージとなる。

だから、こうした戦争映画はいつまでも反戦映画の名作として、人びとの心に残り続けてきたのだ。

戦争映画における共感、そう、われわれは映画館の暗闇のなかで、スクリーンに映し出される主人公の一部始終の行動や心の移りゆく様に同化している。一緒に行動をとまにすることで、われわれと映画の間に親和性がうまれる。

竹山道雄が書いた原作小説『ビルマの豎琴』

続きは本誌でどうぞ

長崎人権平和資料館の理念

被害者の痛みを心に刻み、人権保障と戦後補償の実現、
そして非戦の誓いを。

長崎人権平和資料館 理事長 崎山昇

さきやまのぼる

1958年生まれ。1995年10月の当館の設立に携わり、2000年2月から当館の事務局長、2020年11月から理事長。両親が長崎で被爆した原爆被爆二世で、全国被爆二世団体連絡協議会会長も務める。

今年には敗戦から80年になります。長崎人権平和資料館は、1995年10月1日、史実に基づいて日本の加害責任を訴えようと市民の手で設立されました。今年30年目を迎えています。そして、当資料館は、「訪れる一人ひとりが、加害の真実を知るとともに被害者の痛みを思いを馳せ、一日も早い戦後補償の実現と非戦の誓いのために献身すること、そして反核・反戦・反差別・平和の実現と相互の人間連帯に寄与すること」をめざしています。

当資料館では、「人権なくして平和なし」「韓国・朝鮮人、中国人被爆者」「朝鮮人強制連行、中国人強制連行」「写真で見る日本

の侵略 朝鮮、中国」「日本はアジアで何をしたのか」「皇民化」「すべては天皇と国家のために」「日本軍「慰安婦」問題」「南京大虐殺」「永遠に消せない731細菌部隊」「日本はなぜ無責任であり続けるのか」「日本軍はアジア各地で残虐行為を働いた」「弾圧に抵抗し、戦争に反対した人々」「性差別と性暴力」「清算されていない過去―日本の戦後補償の現状」「消え去らないこの国の植民地主義」「そして、いま私たちは…どんな戦争にも反対します」など、過去に日本が行った植民地支配や侵略戦争における加害行為を史実に基づいて展示しています。

日本の若い人たちや多くの市民の皆さん

は、過去の戦争で日本は被害者だったという認識を持っています。当資料館に来て自分分が知っている日本とは違った日本を知ることになります。あるいは加害者であった日本を知っている人もこれほどひどかったのかとその認識を深めることになります。

なぜそのような残虐なことが朝鮮や中国、アジアの人たちにできたのか。当時のことを知っていた人は、「当時、朝鮮人や中国人は人間じゃなかった。そういう教育を受けてきたし、そういう仕打ちをしてきた」と言われていました。だからこそ、あれほど残虐なことができたのだと思います。そし

続きは本誌でどうぞ

母屋をつくりかえる

火事の中、地面に倒れた。と、誰かが自分の上に覆いかぶさり、気がついたら、その人はもう灰となり、すでに火は消え、自分はその灰に守られ、生きていた。その自分の真先にすべきことが、自分を守って死んだその人を否定することであるとしたら、そういうねじれの生の中に、そもそも「正解」があるだろうか。戦争に負けるとは、ある場合には、そういう「ねじれ」を生る条件とするとということである。

——加藤典洋『敗戦後論』2005年、ちくま文庫

このとき詩人たちはあざむかれたのであろうか。断じてそうではない。同胞の隊伍がアジアの各地にもたらした

小田原のどか

おだわらのどか

彫刻家・評論家、出版社『書肆九十九』代表、芸術学博士（筑波大学）。横浜国立大学教員。主な著作に『近代を彫刻／超克する』（講談社）、『モニュメント原論——思想的課題としての彫刻』（青土社）など。1985年、宮城県生まれ。

残虐行為と、現代詩人が、日本の現代詩に、美辞と麗句を武器としてもたらした言葉の残虐行為とは、絶対におなじものである。

——吉本隆明『高村光太郎』1958年、五月書房

悪から善をつくるべきであり、それ以外に方法はない。

——加藤典洋『敗戦後論』

生の条件としての敗戦、そのねじれ。この中で生きていく。自らが寄つて立つものの根本に、また自らの中に、避けがたい「悪」があることを受け入れる。そこから始める。それ以外には始められない。

続きは本誌でどうぞ